

「百合映画」

完全

ガイド

ふぢのやまい

編者



その関係性を、見逃すな。

「百合映画」300本超え!

「百合」と「映画」を愛する
すべての人に贈る
いまだかつてない
ガイドブック!

を総まとめ!

「百合映画」完全ガイド

ふぢのやまい 編著

星海社

162



SEIKAISHA
SHINSHO

序文

この本は女性同士の関係性を描いた映画作品を取り上げ、その魅力について語ろうとしている。取り上げる作品は、必ずしも明確にそれとわかる女性たちを描いているものばかりではない。女性たちの関係性はサブプロットというべきなのではないかという作品もあるかもしれない。しかしそうした作品についても、あたかも最初から女性たちの関係性がメインプロットであつたかのように、彼女たちの存在を誇張して観ていく。

なぜそんなことをするのか。理由はふたつある。ひとつは、映画史における「女性同士」というモチーフの位置づけを検討してみたいという歴史的な興味があるから。もうひとつは、現在の日本における「百合」という言葉について、これから説明するように私たちがある歪みゆがみを抱えているから。

「百合」と見なせるような映画は古くからあつた。日本では、1930年代にはすでに、

夭折した及川道子を主演に撮られた清水宏『港の日本娘』（1933）、吉屋信子の原作による石田民三『花つみ日記』（1939）といったいわゆる「エス」ものと呼ばれる作品群があった。海外においても、「最古の女性映画」と称される、寄宿舎での同性の年上への淡い思いを描いたレオンティーネ・サガン『制服の処女』（ドイツ・フランス合作）が1931年に公開されている。とはいえ——本書の文脈でいえば『花とアリス殺人事件』（2015）と『リップヴァンウィンクルの花嫁』（2016）の——岩井俊二がたびたび影響を公言するクロード・ガニオン『Keiko』（1979）の公開時ですら、「百合映画」あるいは「女性映画」「レズビアン映画」という言葉はまだ馴染みのないものであっただろう。

那須博之『セーラー服百合族』（1983）は、「百合」という言葉の普及に大きな影響を与えている。制服の少女たちが睦み合う姿や、男性の乱暴なセックスへの反発というようなテーマは、現在の「百合」のイメージにも部分的に受け継がれていると言えよう。古い映画について「百合」映画だと言えるとすれば、こうした比較的新しい作品によって生み出されたモチーフとしての「百合」を事後的に当てはめることよってのことであろう。だから厳密には、1930年代の作品までも取り扱おうとする本書において、「百合」は非歴史的なものだ。

とはいえ、これから述べるように私たちは「百合」が歴史を超越した静的なものとなつてしまうことに抵抗しようとしており、「百合」が時間とともに絶えず変化していくことを望んでいる。概念の正当な範囲を超えて映画史を参照するのは、私たちが範囲外にすら「百合」を見出してしまふということを通じて、概念の変化可能性を担保しようとしているからである。「百合」の映画史的な検討とは、そういった意味で行われるときのみ可能なものだろう。

ではもうひとつの理由、「百合」という言葉について私たちが抱えている歪みとは、どのようなものか。

本書タイトルの中心を成すこの単語は、いまや頻繁に目にする言葉であるにもかかわらず、その意味を捉えることが難しい。そもそも「百合」とは何か。たとえば2016年から例年ヴィレッジ・ヴァンガードによつて開催されている『百合展』のステートメントでは、開催年にもよるがおおむね「女性同士の何か特別な感情を伴う関係性のことを指す」と説明されている。これはあまりに曖昧で、「百合」とそうでないものとを識別するには、ほとんど役に立たないように思われる。そのことは展覧会側も承知しているようで、20

19年に発表された脚本家・綾奈ゆにこあやなによる「序文」では、何が「百合」なのかは最終的に観る側に委ねられる、とされている。^{*1}

言い換えれば、「百合」とは作品に最初から帰属する属性であるというよりも、受容者側が作品に触発されることで、いわば個人的に見出すものであるとされている。こうした考え方に沿って言えば、私たちが共有している「百合」の観念とは、「百合」として最初から存在している作品のファンが共有するものというよりも、作品としては別々のものに各々の人間が「百合」という同じものを見出している、というようなかたちで存在していると言える。

こうした「百合」の観念上の自由さの一方で、では「百合」について私たちがイメージするものがどの程度多様なかと自問してみると、どこか不安を覚える。

先述の『百合展』においては、制服を着た少女たちの写真やイラストがしばしばメインビジュアルに掲げられていることに象徴されるように、学校のイメージが目立っている。これは単に展覧会のコンセプトがそうであるというよりも、そもそも私たちが共有する「百

*1 綾奈ゆにこ「序文」百合展（最終閲覧日2020年2月12日）<http://yuriten.com/2019/>

「百合」が学校に関するイメージをその中心に位置付けているからではないかと思われる。このことはたとえば、「社会人百合」なるものが単に「百合」とは表現されず、わざわざ区別の符号として「社会人」を加えられていることから察せられる。

「百合」の多様性についての不安が露呈するのは、明らかに「女同士の感情的結びつき」が見て取れるにもかかわらず、それを「百合」と呼ぶのをためらうようなイメージに出合ったときだ。そうしたイメージもまた人によって異なるのだろうが、独断を承知で挙げてみるなら、そこに描かれる人々が政治的に正しくなかったり、政治的な運動をいざなうものであったり、露骨な性的描写が含まれていたりするようなものなどだ。

つまり、何を「百合」とするかについて表向きには自由とされながらも、「百合」の中心と周縁を決定する暗黙のルールが存在していて、それがたとえば学校のイメージの頻繁な登場といったかたちで現れているのではないか。

より突っ込んで言うなら、「百合」の中心と周縁という構図は、イメージから安全な解釈を確保し、危険な部分については隔離するという、ある種の安全装置として機能しているのではないか。これはまず何よりもセクシュアリティの問題であるが、イメージと同じくらい多様な受け手のジェンダーは、イメージとの相互作用によって更にその複雑さを乗算

的に増してしまうので、限られた紙幅で論じることは断念せざるを得ない。ただ、そうした多様性のうちに、様々な状況に応じて、たとえばセーラー服のイメージが「百合」のうちで特権的地位を占めるといふような勾配が生じ、そうした勾配にセクシュアリティをめぐる何らかの葛藤が忍び込むというのは、ありそうな話である。中心的なイメージが存在すること自体を拒否する必要はさしあたりないだろうが、しかしそれがあくまで偶然の産物であり、自明視されるべきでないことは、折に触れて確認すべきだ。

こうした見地に立つとき、たとえば「百合」定義をより厳密化していったとしても、あまり意味はないだろう。それでは中心を再強化するか、せいぜいその位置をこっそりと植え替えるだけであって、多様であるはずの「百合」が制度化されているという点について切り込むことはできない。

『百合展』が言うように、「百合」が受容者によって見出されるものであるとするなら、私たちはすでに、そこに生きる二人と、二人のまなざしを見つけてしまっている。ならば私たちはむしろ、「私たちの関係性」というほとんど何にでも当てはまってしまうような「百合」の曖昧さを活かしていく道を探りたい。何を「百合」とするのかは各人に委ねられる

ということをあえて過剰なまでに真に受けて、女が二人映っくい（て関係しているように見える画面を見るたびに「百合だ」とつぶやく。なぜ？ 『ベツカムに恋して』（2002）で一秒だけ繋がれる手を、『犬猫』（2004）での場所を超えて向かい合う視線を、『水の中のつぼみ』（2007）で吹く風を見過ごしてしまわないたくないから。そして、それが一体何なのか知りたいから。自分が「百合だ」とつぶやいてしまったことに誠実でいたいから。この方法は、結局あらゆる作品を「百合」へと単一化させていくだけではないかと思われるかもしれない。ある側面ではその意見は正しい。しかし、「百合」へと収束させていくことは、逆説的に各作品がもつ固有性へと拡散させることにもなるのだ。

本書はいわゆる王道的な「百合」作品を多数扱う一方で、「百合」の共通認識からは離れているように思われる作品をも「百合」であると主張することがある。その解釈は場合によつてはほとんど妄想的に映るだろう。だがそうしたこじつけによつてこそ、かえつて見たことのない「百合」が見えてくるのだ。

スパイク・ジョーンズ『マルコヴィッチの穴』（2000）を「百合映画」として見た者はほとんどいないだろう。そのタイトルも相まって、多くの場合は男性を主軸にした映画として受容されてきた。だが、これをあえて二人の女性に焦点化して見直してみたい。

するとただちに、これほどまでに複雑怪奇な「女と女」を描いた映画が存在していたのか、と驚かされる。

私たちにとって、「百合」は約束されたものではなくむしろ出発点だ。なんの変哲もなかった写真の中に霊を見つけてしまった途端に写真全体が「心靈写真」になってしまうときのような、それを見出してしまった瞬間を核として作品全体が再構築されていくような不気味な何かだ。それは同時に、制度化された「百合」を不断に再構成し続けるためのチャンスとしても機能するだろう。知っている「百合」とは別物であるにもかかわらず、それが「百合」であると思ってしまった瞬間、確かに捉えていたはずの「百合」が軋きみながら変形する。中心と周縁が存在することが問題なのではなく、制度として硬直してしまうことが問題なのだ。つぶやくことを恐れてはならない。

最後に、本書の書かれ方について一点書き添えておこう。本書は映画を紹介するガイドブックであるが、同時に私たちは、この本を単なるバイヤーズガイドにもしたくなかった。つまり、簡単なあらずじと見どころを紹介した上で「こんな人にオススメ」で済ませてしまふようなものにしたくなかった。本書が取り上げる作品数は300本を超えるが、あら

すじだけに集中すれば、そのすべては「ある日、女と女が出会い、結ばれる、あるいは別れる物語」になってしまうかもしれない。映画はあらずじではない。この本の紹介文はおおむね、すでにその作品を見た人が、同じくすでに見た人に向けて語るような態度で書かれている。いわゆるネタバレも随所に存在する。しかし私たちは、こうした態度こそが映画の面白さを伝えるのに最適であると信じている。

紹介の際には作品へのアクセス情報も可能な限り掲載した。一人の人間が作品を完全に見尽くすことはありえない。あとに残るのは、常に何かを見逃したという感触だけ。私たちが見たものもまたごく僅かな一部に過ぎない。だがそのことが、私たちをまた次の作品へと向かわせる。あなたがこれまでに見たことのないものを見る、本書がその助けとなることができたなら、それは望外の喜びである。

ふぢのやまい

鶴田裕貴

Part.

2

海外

編

67

Part.

1

日本

編

15

凡
例

14

序
文

3

目
次

Part.
3

アニメ
編

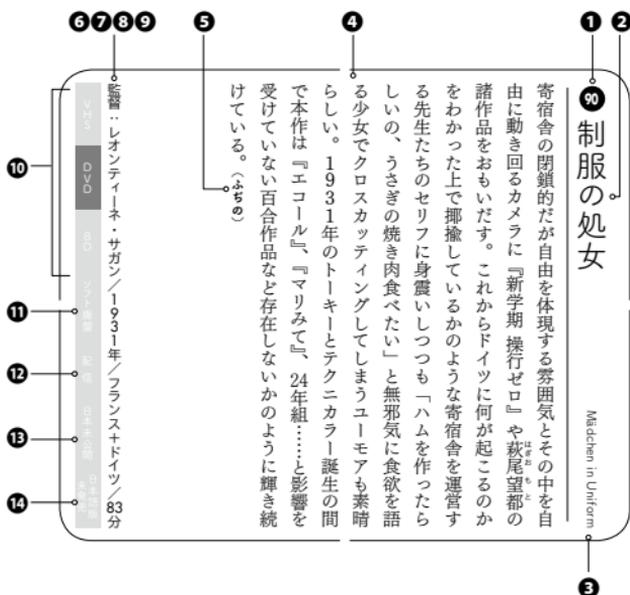
177

あとがき

198

執筆者紹介

204



① 作品番号 ② タイトル ③ 原題または英題

④ 本文 ⑤ 執筆担当者

⑥ 監督 ⑦ 製作年 ⑧ 製作国 ⑨ 上映時間

⑩ VHS・DVD・BD → 現時点での最新版ソフト（たとえば、VHSとDVDが存在する場合はDVDのみ記載）。視聴環境に鑑み、DVDとBDがともに存在する場合は併記した。

⑪ ソフト廃盤 → 記載したソフトが廃盤または入手困難。

⑫ 配信 → いずれかの媒体にて、サブスクリプション、データ販売、レンタル等の方法で視聴が可能。

⑬ 日本未公開 → 日本では劇場公開されていない。

⑭ 日本語版未発売 → ソフトに日本語版が存在しない。

※情報はすべて2020年5月現在のもの



志乃ちゃんは
自分の名前が
言えない

でーれ! GALS

思春期ごっこ

ゆめのかよひ

さいおうち

地獄少女

バウンス! GALS

ヒストリア

DVD

ヴァンワインクル

リンダ
リンダ
リンダ

愛の新世界

下妻物語

火屋の女

Part.1 日本

編

1933

1933

櫻の園

DVD

DVD

2019

吹雪に

吹雪に

吹雪に

カラコエの花

DVD

DVD

DVD

セーラー服

DVD

大嫌いで、大好き

1 港の日本娘

本作は江藤淳^{えとうじゅん}と蓮實重彦^{はすみしげひこ}の対談集『オールド・ファッション』で江藤淳がふいに口にする「あした支那^{しな}事変がはじまる、その直前の昭和十年代の特殊な輝き」をそのままフレームに収めているかのような「贅沢」なショットで溢れている。多段階ズームと拳銃の発砲、『牯嶺街^{クイリンチエ}』のような陰影、長すぎる横移動などのショットに本気で目を疑う。足に毛糸が凄まじい量絡んでいるのに気づかないほど激しくダンスに夢中なふたりとそれを斜めに動き回りながら追うカメラ。引きちぎれて宙を舞う港に舞うカラフルなテープと、ネオンの夜景。1930年代にはすでに、過ぎ去りし学生生活のノスタルジーの中だけで生きてしまった。(ふちの)

監督…清水宏／1933年／日本／72分

ソフト

DVD

BD

ソフト廃盤

配信

2 花つみ日記

昨今の邦画に氾濫する百合映画ブームなど、30年代の反復にすぎないんじゃないか。そんな風にするら本作や『港の日本娘』を見てしまうと思ってしまう。尋常じゃないオーラを放つ高峰秀子^{たかみねひでこ}の姿を、カメラは陰影をつけながら捉え続ける。30年代の大阪の街並みは2020年からすると豊かすぎるし、どれほどの未来になろうとこの叙情に追いつけないことに絶望的になる。このすぐ2〜3年後に空襲により街並みのすべてが消失している事実には、製作者たちが気づいてしまっているかのように思える出征シークエンスでの切返しと、ロープウェイがトンネルを抜けた瞬間に歌が静かにはじまっていく。泣かずにいられるだろうか。(ふちの)

監督…石田民三／1939年／日本／73分

ソフト

DVD

BD

ソフト廃盤

配信

3 野戦看護婦

当時の宝塚女優・南風洋子みなかぜようこ（これがデビュー作）演じる先輩看護婦と、新米看護婦との百合。ベッケルの『怪盗ルパン』的なタカラヅカした動作で直角に曲がり、鮮やかにジャンプしながら戦場を駆け抜け、戦火のなかの演芸会での「愛染かつら」シーン（宝塚ごっこ）にガチになる南風洋子の姿はたしかに本作のDVDジャケット的なものを期待した鑑賞者をどこまでも満足させるだろう。サラリと同性愛を諷められる展開にも驚かされるが、激化していく戦火を描いた後半も忘れられない。当たり前だが、この頃の役者はみんな兵役経験があるわけだし、銃器も車も53年の映画なだけあってどの程度の作り込みかはわからないが、泥にまみれた輝きを見せている。リアリティへの気迫が違う。これは朝ドラではない。（ふぢの）

監督：野村浩将 / 1953年 / 日本 / 92分

VHS

DVD

BD

ソフト廃盤

配信

4 卍

別に本作を百合だということに固執するような立場になつたわけではないけれど、ある作品が百合であると烙印を押された途端に作品の何かが毀損されたと思いは始める人々のことは嫌になれない。そうした「百合フォビア」的人物、その存在自体があまりにも百合クリシエだからである。まさにそれは増村作品の登場人物たちの態度を思わせもする。過剰さによつて発生する速度、「もうとことんやってくれ」と川口浩かわぐちひろしのように言い放つて身を任せてしまいたくなつてしまう魅惑、それと同時に発生するそれに対する生理的な拒否「うちそういうんはいややわ……」etc……。それはそうとして本作の語り草になつている岸田今日子きしだ きょうこの若尾文子の裸を見ての第一声「うち、あなたに殺されたい」はサイコーとしか言いやうがない。美しさも、幸せになりたいという声もどこにも届いていない。充溢する死への速度。そして死に急いでも

何にもならないという焦燥感で作品内部が満ち溢れている。リメイクを重ねていくたびにより通俗的な同性愛モチーフが前景化させられていく『卍』ものの第一作である本作は、安直に「百合映画」だなんて断定することはこちらにためらわせるほどに、より原液的な濃度に満ちている。アメリカ産の妊娠薬、インポテンツ、「脇仏」、手のひらに何度も描かれる名前。本作を彩る百合ファクターたちは想像していたよりもずっと多く、その原色の眩さと速度にめまいがせずにはいられない。「すきいんは感情やねん！」（ふちの）

監督…増村保造／1964年／日本／90分

VHS

DVD

BB

ソフト産製

配信

5 美しさと哀しみと

加賀まりこ演ずるけい子と八千草薫演ずる音子。このフォルムの素晴らしさは、ひとえにこの二大俳優のレズビアン関係を官能的に描き出しているところにある。けい子をおつ音子。音子にぶたれて悦ぶけい子。音子を嗜むけい子。二人の歯痒い戯れに、サドマゾヒズムが見え隠れする。歪んだ女性同士の師弟関係と川端康成的な倒錯した愛のもとで、愛する女性のため復讐に燃えるレズビアンに加賀まりこが放つファム・ファタルな魅力には一向に抗えない。けい子の大きくつぶらな瞳は、牡丹の花のようである。瞬きのたびに萎れては咲き、咲いては萎れ、萎れては咲く。彼女の着物が真紅なのは、悲恋に苦しみたゆむことなく赤い瞳から涙が零れ落ち続けたからなのだろうか。（見玉）

監督…篠田正浩／1965年／日本／106分

VHS

DVD

BB

ソフト産製

配信

6 残酷おんな情死

「なんか面白いことない?」「戦争でもはじまってくんねえかな」。部屋で大暴れしてトランペット吹き鳴らすその速度。ノワールのな照明に包まれた70年というより69年の熱気に溢れた日本は異国のよう。でもそこには二人の居場所はないからこそ、どこまでも燃え上がるしかない。殺伐としたカットの嵐を抜けて本当に燃え上がってしまいう幽玄的なエンディングの風景はジャン・ローランに接近している。真理アンヌの堂々とした演技は否が応でも記憶に残る。のちに大量のピンク映画を量産する西村昭二郎監督のなかでもベスト作品のひとつではないだろうか。(ふちの)

監督…西村昭二郎／1970年／日本／86分

VHS

DVD

BD

ソフト廃盤

配信

7 火星の女(夢野久作の少女地獄)

胸やけしそうな70年代然としたロマンポルノ台詞の応酬(「人生は虚無だとおっしゃっていました!」)と「少女」には全く見えない年齢の二人の主人公に百合的なものを期待した観客は大きく裏切られることは想像に容易いが、本作もまた『百合族』と同じく前田米造映画であり、そこに色彩感覚が冴え切った小沼勝の演出が大暴れしている。画面を覆いつくす堕胎の赤、海の横のキリスト教墓地を捉えた横移動、教会で神父に迫る際に背景をとんでもない速度で動かした撮影(役者の足場をすこい速さで動かしている?)は必見。全力疾走で過剰さを突き抜けていく二人は「火星」にたどりつく。過剰さが増した日本版『小さな悪の華』とも言えるような本作を、いったい当時の観客はどう受けとめていたのだろうか。(ふちの)

監督…小沼勝／1977年／日本／92分

VHS

DVD

BD

ソフト廃盤

配信

8 悲愁物語

原田芳雄が白木葉子（もちろん『あしたのジョー』から）という名の新人女優をゴルフ界のスターに仕立てるスポコン映画……と思いきや、突如主人公に嫉妬しすべてを手に入れようとする近所の女性が登場してからは『ルームメイト』もびっくりなサイコサスペンス作品（らしきなにか）になる。姉のための殺害を決意しピストルを組み立てる弟、自宅を占拠する群衆と放火され崩壊する一軒家……梶原一騎製作のもとで暴れ切った鈴木清順の怨念を単に「怪作」の一言で済ますことができるはずもないが、眩しいほど過激に配置された原色や観客をあざ笑うかのように浮遊するカメラにのちの大正浪漫三部作の萌芽を見つけるのは難しくもない。（ふちの）

監督…鈴木清順／1977年／日本／93分

VHS

DVD

DB

ソフト産監

配信

9 Keiko

実話に基づくかどうか、史実と異なるかどうか、この際そんなことはどうでもいい。だが「ほんとう」は映画に存在する。この映画を観るとそんなことを思う。岩井俊二が自らのルーツとして公言していることから本作は『リップヴァンウィンクルの花嫁』の着想の一つだろう。だが『殺人拳2』の外国人の一人が撮った映画がまさか全編京都ロケのハイパーリアリズム（和製ロメール？ シネマ・ヴェリテ？）映画だと聞かされても誰が信じられようか。「ようこそ、絵描きさん」の一言とともににはじまる二人の同棲は、グロテスクなお見合いによって半強制的に終焉を迎える。70年代の日本に産み落とされ、追隨する作品が存在しないATG随一の幸福の結晶。（ふちの）

監督…クロード・ガニオン／1979年／日本／117分

VHS

DVD

DB

ソフト産監

配信

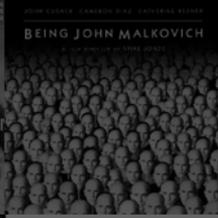
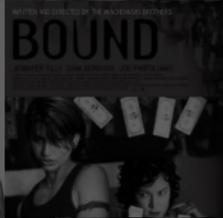


Part.2
海外

編 Die bitteren Tränen der Petra von Kant

1931-

2020



90 制服の処女

Mädchen in Uniform

寄宿舎の閉鎖的だが自由を体現する雰囲気とその中を自由に動き回るカメラに『新学期 操行ゼロ』や萩尾望都^{はぎおもと}の諸作品をおもいだす。これからドイツに何が起こるのかをわかった上で揶揄しているかのような寄宿舎を運営する先生たちのセリフに身震いしつつも「ハムを作ったらおいしい、うさぎの焼き肉食べたい」と無邪気に食欲を語る少女でクロスカッティングしてしまうユーモアも素晴らしい。1931年のトーキーとテクニカラー誕生の間で本作は『エコール』、『マリみて』、24年組……と影響を受けていない百合作品など存在しないかのように輝き続けている。(ふちの)

監督…レオンティーネ・サガン／1931年／フランス・ドイツ／83分

TV VHS DVD OB ソフト発売 配信 日本未公開 日本語版 未発売

91 夜の看護婦

Night Nurse

バーバラ・スタンウィックとジョン・ブロンデルによる30年代のプレ・コード期の映画。新米看護師になった主人公と先輩看護師はある日、明らかな弾傷を交通事故と言いつ張る奇妙な患者を担当する内に、陰謀に巻き込まれていく。後半のごった煮の奇妙な映画感は栄養失調で遺産相続あたりでかなり「???」な展開になるのだが、『野線看護婦』してる前半のガリリームービー感も百合映画的にはうれしいし、後半の展開の速度とアクションは同年に『民衆の敵』を撮った30年代のウエルマンらしさがある。南風洋子^{みなかぜようこ}に劣らずとも悪漢相手に殴り、殴り返すバーバラ・スタンウィックのアクションが見どころ。(ふちの)

監督…ウィリアム・A・ウエルマン／1931年／アメリカ／72分

TV VHS DVD OB ソフト発売 配信 日本未公開 日本語版 未発売

92 黒衣の処女

Anna und Elisabeth

恐らく最古のレズビアン的表象をめぐる映画のひとつであろうと言われている『制服の処女』の主演俳優であったヘルタ・ティールとドロテア・ウィークは、その2年後に撮影された本作で再びスクリーンにその姿を共に見せることとなった。病を治癒させる力を持つと噂されているアンナと、不治の病で立ち上がることが出来ないエリザベスとの交流を描く本作は、全体的には扇情的な音楽と共に、あまり品があるとは言えないクロスアップなどを用いて、人情味たっぷりに描かれているので少々くどさを感じてしまうというのが正直なところ。しかし、車椅子生活をしていたエリザベスが立ち上がったとの噂を聞きつけた町の住人たちが一斉に家を飛び出し、アンナとエリザベスの乗船するヨットへと駆けつけるシーンの運動感と言ったらなんとも素晴らしいし、エリザベスに起きた奇跡の所在がアンナの力にあるのか、それとも

神の御業みわざなのかを言い争うシーンでの、画面右上の神父の顔と左下のエリザベスの顔を捉えたダッチアングルが、エリザベスが立ち上がることで水平の画面へと変化する瞬間はまさに「立ち上がることを描いた本作に許された特権的な表現であり魅力的な演出ではないだろうか。決して傑作であると断言できる作品ではないのだが、初期における同性愛をめぐる映画の一作品として一見の価値はあると思う。(牛久)

監督…フランク・ヴェイスマー／1933年／ドイツ／74分

VHS

DVD

BD

ソフト廃盤

配信

日本未公開

日本映画
大光堂

93 女たち

The Women

冒頭からいきなり、とんでもない速度で展開される女たちの消費群像に圧倒される。大恐慌なんか忘れてしまったかのようなエキセントリックなフアッションに身に包んだギブソン・ガールたちは、マニキュアに泥浴に大忙しだ。登場人物を動物に喩えて紹介している点が暗示するように、女たちはとにかく欲求に素直な存在とされる。それは同時に女たちの感情にはあまり深さが無いのだという見下した態度でもある。登場人物が全員女性といういかにもな作品でありながら、いま私たちが百合と呼んでいるものからは遠いように見えるのは、男性という不在の中心のせいだけでなく、感情なるものの捉え方が私たちと違うからだろう。別種の感情には別種の百合が生まれる。(鶴田)

監督…ジョージ・キューカー／1939年／アメリカ／133分

VHS DVD BDソフト販売 配信 日本未公開 日本語版 未発売

94 イヴの総て

All About Eve

本作で何度も叫ばれる「ヒステリー」という語によって、私たちは嫉妬という感情が伝統的に女のものとされてきたことを思い出す。それは男性目線の偏見である一方で、さまざまな物語において女たちを結びつけてきた。マーゴはイヴに対する嫉妬を遠因として女優を辞め、イヴはマーゴと総て同じになる。イヴもまた将来のスター女優に嫉妬するのである。彼女たちはお互いを憎みながら、お互いの存在を奪って相手そのものになろうとする。それはある意味で最も深い愛である。「女性同士の感情的な結びつき」に常にどこか嫉妬のようなものがつきまとうとすれば、それは嫉妬が愛と構造的に似ているからだろう。おそらくそこには男性的な視線もまた侵入している。(鶴田)

監督…ジョセフ・L・マンキウィッツ／1950年／アメリカ／138分

VHS DVD BDソフト販売 配信 日本未公開 日本語版 未発売

95 処女オリヴィア

Olivia

マックス・オブユルス『輪舞』と多くのスタッフを共有しながら、スタッフの多くが女性でもある本作は、その仰々しい邦題とは裏腹に思春期の心情をある種のサスペンスのようにクロスフィルタで切り取った上質な寄宿舎映画であり、誰もが『制服の処女』を想起せずにはいられないだろう。愛しい人の毛皮を被り一息に吸い込むシークエンスに見られるような学校内に充満した発露できない性欲が暴力的な死の匂いに変形していく流れに（決してなにもとつ直接的に映されないのにもかかわらず）こちらもやられそうになる。ジャクリーヌ・オードリーの名前が一部の好事家（こうずか）に名前が知られているだけであることが惜しまれる。（ふちの）

監督：ジャクリーヌ・オードリー／1950年／フランス／96分

VHS

DVD

BD

ソフト廃盤

記名

日本未公開

日本語版
未発売

96 リンチ 私刑される女

Woman They Almost Lynched

明確に白と黒で衣装が二分された女vs女の西部劇。『大砂塵』に匹敵するほどの感情と感情のぶつかりあいバイオレンスに結集する中盤の展開に大興奮させられ、さらに敵味方が入交り、互いがかばいあう中でただただ職能を果たすラストは百合読者であればこそより理解できるのではないだろうか。全く物語に関係ないが、スクリーンプロセスで移動する馬車の中で拭いたナプキンを窓の外へ放り投げるヒロインのショットがある。あまりにも一瞬で見逃してしまうほどなんてことのないショットのように思われるが、当然馬車からの窓は「壁」なのでナプキンが跳ね返っており、それに何ら突っ込まれることがなく平然と会話が進行しているという驚愕のシークエンスになっている。（ふちの）

監督：アラン・ドワン／1953年／アメリカ／91分

VHS

DVD

BD

ソフト廃盤

記名

日本未公開

日本語版
未発売

97 大砂塵

Johnny Guitar

タイトルロールの男性主人公「ジョニー・ギター」を差し置いて、女ふたりの激烈な対立を描き続ける異色西部劇。「百合」的な読みに関しては『セルロイド・クロゼット』を見ていただければよいが、製作背景の混沌は本編以上に興味深い。本来凡庸な西部劇になるはずだった本作は、敵役を演ずるマッケンブリッジに対して私的因縁のある主演女優クロフォードが、突如権力を行使して、脚本での主演男優の役割をすべて自分の役割に変えさせた……という経緯を経て「異色」へ転身する。故に紋切り型の対決の代わりに女ふたりが火花を散らす……実際の女優ふたりの関係を反映するかのよう。監督のレイはストレスのあまり仕事の前に何度も吐いたという。(高橋)

監督…ニコラス・レイ／1954年／アメリカ／109分

VHS
DVD
BD
ソフト廃盤
配信
日本未公開
日本語版
未発売

98 悪魔のような女

Les Diaboliques

不自然すぎるスクリーンプロセスだとか戯画化された他者の視線であるとかジェネリックヒットコック感溢れているなかでも、ラストの倒れゆく主人公の片手の動きはかなり『サイコ』。途中から見始めたかのような唐突な導入に耐えうるパンチラインに溢れた脚本が魅力的。石田民三『花つみ日記』では少女たちが「天国はあると思う？」と問いあう美しい風景が展開されていたが、本作では「地獄はあると思う？」と少女とは呼べない竿姉妹同士が問いかけあう。見つめていた対象(死体)をアップで映しながら進行していたからこそ、最後の偽目玉がグロテスクに見える。(ふぢの)

監督…アンリッジョルジュ・クルーゾー／1955年／フランス／114分

VHS
DVD
BD
ソフト廃盤
配信
日本未公開
日本語版
未発売



Part.3

アニメ編

1986 -

2020

映画 ドラえもん のび太と鉄人兵団

2011年公開のリメイク版に寄せられた不安のひとつは、オリジナル版である本作のリルルとシズカの別れのシーンを超えられないという懸念によるものだっただろう。のび太たちが何もわからぬまま迎える満点の勝利に喜ぶ最中、自己犠牲により戦いを終わらせたリルルは消え、それを看取るのはしずかのみという不意をつく対比が印象的な本作は否応なく涙を誘う。ピポとのび太の物語としてもう一本の軸が加えられ、より「泣きやすく」リアレンジされたリメイク版では「相互理解」という物語を強化。その結果「ドラえもん」という存在そのものが抱える問題点が浮き彫りになってしまっている。ただどちらも屈指の名作であることに変わりはない。(将来)

監督…芝山努／1986年／日本／100分

VTR

DVD

DB

ソフト産監

配信

少女革命ウテナ アドウレセンス黙示録

世界が持つ悪意としての王子様幻想を及川光博おいかわみつひろに演じさせる本作のジョークはあまりに黒い。目を引く演出と楽曲の乱発に目を覆われがちだが、主題はTV版同様に閉じた世界Ⅱ支配・規則からの脱出である。アンシーとウテナ、樹璃ジュリと枝織エヂオリ、決闘者と花嫁を繋ぐ王子様(の死)はその象徴だ。共犯者と手を取り主体的に自己革命を果したアンシーは、学園Ⅱ規則を離れ、荒野ながらも青空の見える世界にウテナと孵るかえ。王子様の依代よりしろを求める枝織は未だ棺の中にいる。その彼女に縛られ続けるのが樹璃なのであり、自身にもその感情は変えようがない。その仄暗い関係性にどうしても魅せられてしまうのは、それが青春の悼みいたそのものだからだろうか。(将来)

監督…幾原邦彦／1999年／日本／85分

VTR

DVD

DB

ソフト産監

配信

284

それいけ！ アンパンマン

ロールとローラうきぐも城のひみつ

汚れたローラが歌う。まだ綺麗なロールが何の歌かと訊く。ローラは「これはロールとローラの歌だよ」と答える。初めて聴く歌なのに何故、曲名に二人の名前がついているのだろうか。それはこの映画が幼児向けだからだ。幼児にクロノスは存在しない。だが、アンパンマンとは日本の幼児の成長に奉仕する存在であり、本作も例外たることを許されない。ローラの汚れが落とされて、代わりにロールが汚される。この転移が映画を前と後とに分割し、途端にアンパンマン一味が介入してくる。二人だけのものであった歌は無残にも合唱される。こうした脅迫的な社会参加の観念は、スクリーンから現実へという冒頭の見事なシークエンスに既に予告されていた。(鶴田)

監督…大賀俊二／2002年／日本／50分

VHS

DVD

BD

ソフト産盤

配信

285

マイマイ新子と千年の魔法

戦後間もない日本・山口県を舞台とした少年少女の日々を描くアニメーション。都会から引越してきた引つ込み思案の少女・貴伊子^{きいこ}が空想癖のある主人公・新子^{しんこ}と打ち解けていく物語……であることは確かだが、それはさておきあまりにも精緻な情景描写、綿密な調査と取材に裏付けされたであろう過去の街並、言葉遣い、原風景としての田舎の風景に圧倒される。牛車や侍が駆け回る1000年間の空想や、終盤も終盤に突如投入される何か意味があるとしか思えないカメラワークで描かれる何かに意表をつかれるものの、「本物の感情を出すことの大切さ」「どんな時代にだって平等に明日は来る」というメッセージを無言の説得力で伝える傑作。(将来)

監督…片淵須直／2009年／日本／93分

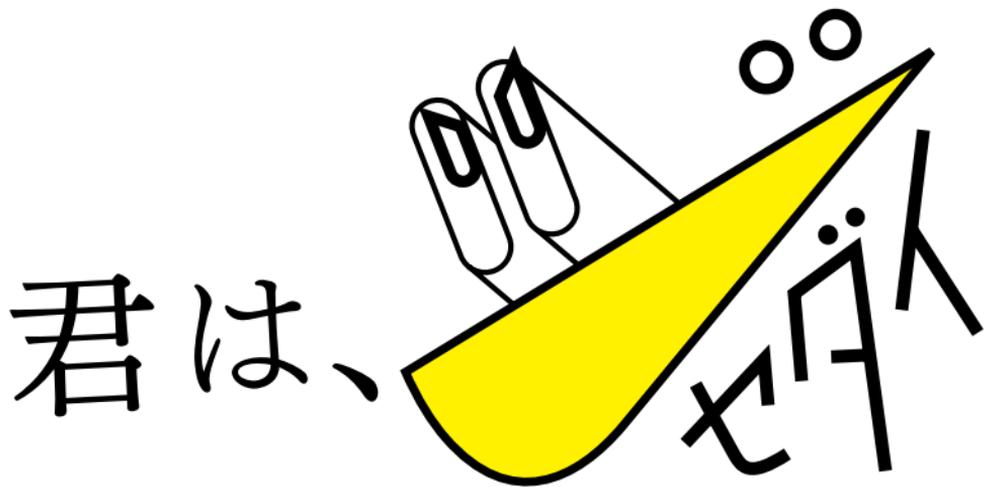
VHS

DVD

BD

ソフト産盤

配信



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!